休ヶ岡八幡宮

薬師寺の南門から出ると、日本の神聖な守護者であり戦いの守護神である八幡の神を祀る社であり、寺の鎮守の社でもある休ヶ岡八幡宮があります。石積みの壇上に建った本殿と南北の脇殿を擁する現在の社は、1603年に建てられました。

社の名前の「やすみ」は「休むこと」を意味し、伝説によれば元々の社は日本全国の八幡宮の総本宮がある大分県宇佐の八幡の神の休憩所として9世紀に完成しました。807年、八幡は彼が後に祀られた、他の奈良の七大寺である大安寺に行く途中でここに立ち寄ったといわれます。別の伝説では、まだよく知られていなかった八幡が神聖な守護者となった東大寺の大仏の開眼供養会に行く途中、ここで休んだといわれます。

八幡は神道と仏教両方に登場し、薬師寺への登場は日本の仏教がどのように神として知られる古来の神道の神々への信仰と平和に共存してきたのかという一つの例です。実際、何世紀にもわたって薬師寺のまわりの5つの村の住民は毎年7月に龍王社と呼ばれる薬師寺の東院堂の隣の別の社に集まってきました。米のような穀物を育てている村人たちにとって身近な味方で、水の神としても知られる蛇の神である龍の慈悲を請うために儀式を行います。9月に行われる2つ目の祭りは実りある収穫をもたらした土地の神々に感謝するために休ヶ岡八幡宮の地で行われます。こうした理由から、八幡と仏教の神々の折衷は寺の守護だけでなく村人の守護も確かにするものでした。